

2002年度環境総研講座(第1回～第4回)を振り返る

2002年度は大阪信愛女学院短期大学公開講座(城東区、鶴見区共催)の内、環境総研講座として4回の公開講座が開催されました。いずれも環境に関わる現代的諸問題として興味深い内容でした。ここで、簡単に振り返ってみることにします。

文明の前には森林があり、文明のあとには砂漠が残る

第1回環境総研講座は、関西学院大学名誉教授小嶋吉雄氏に、水問題を中心とした環境問題についてご講演いただきました。

地球は水の惑星といわれるように水は豊富に存在し、生命にとっても非常に重要な存在となっている。そして、水と生命は非常にうまく調和して存在している。人間は水を贅沢に使っているが、他の動物は非常に節約している。豊富な水を存分に使える時代は終わり人間も水の使い方を考えなければならない時代になった。

熱帯雨林の消滅と種の絶滅は急速に進み、砂漠化も各地で進んでいる。酸性雨の問題も欧米だけでなく日本も深刻な状況になりつつある。地球温暖化も島国の日本に重大な影響を与える。豊富なはずの日本の水も渇水の危険をはらんでいる。人間の使う水の量の急激な増大を深刻なものとして考えなければならない。しかし、今の生活を昔に戻すことは非現実的で、新しい方策の模索が必要となっている。

市民による里山保全活動と野生ジカの保護管理

第2回講座は市民ミーティングという企画で、(社)大阪自然環境保全協会副会長の木下陸男氏に問題提起を行っていただいた。

同協会は大阪近郊の自然保護活動を行っている団体で、はやくから里山保全を唱えて、カマ・ノコ・ナタを自ら手にして山仕事を始めていた。それは、長年の自然観察活動から、森林の荒廃が野生生物の減少あるいは人間との摩擦を招いていることに気づいたからである。里山保全＝森林整備と思われがちであるが、本来の目的は里山に棲む野生生物の保護である。

今回、鳥獣保護法が改正されて問題化してきた野生鹿の保護・管理の問題は協会の重要テーマであり、1999年に改正された鳥獣保護法に基づいて大阪府が示した野生鹿保護管理計画の問題点が示された。問題点を要約すると、①野生鹿が増加しているといわれるが十分な調査がなされたわけではない、②地方へ保護管理の権限が委譲されたが、保護管理の十分な知識と技術をもった担当者の配置が不十分である、③農業被害も農業作業形態の変化や野生鹿の生息環境(人工林化とその荒廃、野生鹿の生息環境を分断するニュータウン開発や道路建設)の悪化も原因としてあるので、土地利用計画のなかで野生生物保護の観点も十分に盛り込まなければならない。

協会では、里山保全作業の充実とともに、府の調査活動への協力及び協会独自の調査活動も実施していくので、市民への理解と協力が呼びかけられた。

成熟社会のまちづくりと都市環境

第3回は都市基盤整備公団関西支社建替業務部トータルリニューアル課課長田中貢氏にご講演いただきました。

住みよいまちづくりを実現し、少子高齢化の成熟社会を豊かにすることをテーマに、木造賃貸住宅が集まる密集市街地と近代都市における高層建物の問題を取り上げられた。それは価値観の変化という抽象的な現象を、建築を通じて私たちの眼前に提示する試みでもあった。

木造賃貸住宅は、高度経済成長時には大きな役割を果たしたが、今は老朽化等防災面からの問題点で住環境整備が急がれている。立て替えによる住環境整備の実施には、まちづくりの動機形成、共同化による立て替え後の共同管理の合意形成といったソフト面でのさまざまな困難があるが、実現した興味深い事例もあり、紹介された。

超高層建物は「建物の超高層化により都心も緑溢れる公園のようにできる」という近代的都市計画理論より生まれたが、今は昔ながらの下町の良さを評価し、混在の中でのまちの活力という魅力を認める方向に変わってきた。周辺建物とのスカイラインを尊重し、多少自己日照を犠牲にしつつも、ベタッとした土地利用の建物設計が周囲に優しい設計だという考え方が広がり、「建物内部は建物所有者のものだか、外形や外装は地域のものだ」との認識が求められ始めていることが指摘された。

淡水魚の生態と保護

第4回は近畿大学教授細谷和海氏に、淡水魚の生態と保護について、外来魚の問題を交えて講演いただきました。

現在、外来魚の繁殖と在来種の減少、絶滅が問題となっている。希少淡水魚の国有財産としての価値は、①自然史的遺産、②文化財、③環境指標、④遺伝資源の4つに整理できる。

1991年に環境庁よりレッドデータブックが出されたが、現在76種(全淡水魚の約4分の1)がリストされている。文化庁は4種類(ミヤコタナゴ、イタセンバラ、アユモドキ、ネコギギ)を天然記念物として指定している。

外来魚の弊害は、問題となっているブラックバスについては食害であり、在来種を急激に減少させ、絶滅危機種も現れ、生物の種多様性や地域固有性が失われることになった。ブラックバスは70年代に全国でわずか4水系でしかいなかったが、20年後には半分の水系にまで広がり、実際はほとんどの水系にいたるともいわれている。ブラックバスの急激な増加は高い繁殖性だけでなく、ゲームフィッシングの急速な普及も大きく関係している。

外来魚の問題は、人間側、すなわち社会にあるので、法規制や社会的啓発などの推進が必要である。